

## 大崩海岸における最近13年間の土石崩壊

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-07-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 黒田, 直 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00005796">https://doi.org/10.14945/00005796</a>

## 大崩海岸における最近13年間の土石崩壊

黒田 直\*

大崩海岸国道150号線において道路の不通や自動車事故をもたらし、記録に残っている土石崩壊と落石は昭和33年9月から46年2月まで、それぞれ25件と7件を数える。そのうち、18件の崩壊と3件の落石が静岡市石部で、6件の崩壊と4件の落石が焼津市浜当目で、1件の崩壊が同市元小浜で起きている。

25件の土石崩壊のうち、20件は降雨によるもの、3件は昭和40年4月20日大崩付近で起こった深さ20 kmに震源をもつ震度Ⅳ ( $M=6.1$ )の地震によって石部で同時に起きたもの(木宮(1972)の第1表)、もう2件は同地で起きた誘因不明のものである。降雨を誘因とする崩壊は木宮(1972)の第1表のとおり、3月末から9月にかけて発生しており、主に低気圧の通過、梅雨期と秋の長雨期の集中豪雨、台風の襲来との関連が深い。

崩壊土石の量は木宮(1972)の第1表に示してあるように、石部の大崩壊地における今回昭和46年7月5日の低気圧に伴った降雨による崩壊の3,000  $m^3$ が最大である。石部の大崩壊地での40年5月の台風に伴った豪雨による1,700  $m^3$ 、浜当目での44年6月の低気圧に伴った豪雨による1,500  $m^3$ および石部での44年3月の低気圧に伴った降雨による1,200  $m^3$ がこれに続く。その他の降雨と石部における40年4月20日の地震による崩壊土石の量は400  $m^3$ 以下である。石部と浜当目での7件の落石はいずれも通行中の自動車に当たって多少の被害を与えた。

大崩海岸地域における標高200 m以下の陸地の平均傾斜は、山側では平均26°で安定しているらしいが、海側では32°以上で安定を欠いているようである。今回土石崩壊が起こった石部の大崩壊地は、海側に平均45°傾斜した、海食崖と考えられる、現在最も活動的の大崩壊斜面である。石部における過去の土石崩壊と落石の事故21件のうち、11件はこの大崩壊斜面内で発生している。これの大崩海岸で発生した全事故件数に対する割合は、約3分の1に及ぶ。

大崩海岸地域の地質は長沢ら(1972)によれば、石英閃緑ひん岩、大部分を構成するアルカリかんらん石玄武岩質の噴出岩類とかんらん石斑れい岩、噴出岩類に挟在する火山角礫岩、凝灰角礫岩および頁岩、砂岩層からなる。この火成岩体は、沸石を伴う写生変質と粘土鉱物を生成する地表からの風化変質を受け、またさまざまな方向の亀裂に富んでいる。これらの変質と亀裂構造は本来堅硬な岩体を、極めてもろいものにし、吸水性に富むものになっている。

大崩海岸における過去の土石崩壊は、今回の石部での場合と同じように、上述した急傾斜の地形と変化に富む地質、降り方によっていくつかのパターンに分類できる降雨(あるいは強い地震)とが結

\* 静岡大学理学部地学教室

びついて発生したものと考えられる。なお、大崩の地名は文政3年（1820年）刊の駿河記所載の益頭郡略図に見える。

## 文 献

岩橋 徹・木宮一邦（1971）：大崩海岸道路における最近の大崩壊について．静大教育研報（自然），22，15－28．

気象協会（1965）：Special event．地震月報，172，4．

木宮一邦（1972）：大崩海岸における崩壊の予知について．静岡・大崩海岸の山崩れ災害に関する地質学的研究，研究報告論文集，67－75．

長沢敬之助・石岡孝吉・湯佐泰久（1972）：大崩海岸地域の岩石と変質．静岡・大崩海岸の山崩れ災害に関する地質学的研究，研究報告論文集，35－46．